

古澤巖×ベルリン・フィルハーモニー ヴィルトゥオージ 2018

Iwao Furusawa × Philharmonic Virtuosi Berlin

2018年12月7日(金) START/[昼公演] 14:00 [夜公演] 18:30 観世能楽堂

PROGRAM

《第1部》

1. Call Me Francis Suite 映画『ローマ法王になる日まで』より

Arturo Cardelus(アルトゥーロ・カルデラス)

一人の心優しきアルゼンチンの青年が、史上初のアメリカ大陸出身のカトリック教会長となるまでの激動の半生を、事実に基づき再現した実話の映画化にあたり、スペイン出身のアルトゥーロ・カルデラスが音楽を担当。貧しさや困難にあえぐ人々に寄り添い、環境問題や人種差別、金融システムにも言及し、壁を作ると発言した選挙中のトランプ大統領候補(当時)に苦言を呈するなど、今や世界で政治家以上の影響力を持つ現法王の波乱の人生の陰影を静かに奏で上げ、余韻と感動を深めています。

2. Capriccio Espagnol スペイン奇想曲より

Rimsky-Korsakov(リムスキーコルサコフ)

1887年に作曲。この時期にはリムスキーコルサコフの代表作「シェヘラザード(1888年)」「ロシアの復活祭(1888年)」も生まれており、彼の創作活動がとても充実していた時期でもあります。スペイン音楽の明るい色彩とわかりやすい旋律の華やかなソロが魅力的です。

3. Siciliana(シチリアーナ)

Robert Di Marino(ロベルト・ディ・マリーノ)

シチリアは、地中海に浮かぶイタリア最大の島です。そして「シチリアーナ」は、この島と強く結びついている独特的な音楽スタイルです。シチリア特有のリズムを特徴とし、牧歌的な雰囲気を呼びさまでくれます。本作では、ゆったりとしたシチリアのリズムと、北イタリアで人気の舞踊を思い出させる生き生きと陽気な舞踊のリズムとが交互に入れ替わり、繰り返し登場します。

4. Fire and Flowers(ファイア・アンド・フラワーズ)

Robert Di Marino(ロベルト・ディ・マリーノ)

人生は幻影にすぎないかもしれません。それでもとにかく、暗闇の後には夜明けが、冬の後には春がやってくると思いたいものです。同様に、音楽の醸し出す色合いも暗く沈んだ色から明るく澄んだ色へ、悲しみから喜びへと変わっていくのがわたしは好きです。曲名が示唆するように、本作品は激しく攻撃的な曲調から静かで柔らかなそれへと変化します。

5. limpida ~for ARSOA~

Robert Di Marino(ロベルト・ディ・マリーノ)

「limpida」とはイタリア語で、「湧き上がる透き通った水」、「朝のピーンとした済んだ空気」を表現する言葉です。内面から生まれ変わって、輝く美しさ、強さをイメージして、ロベルト・ディ・マリーノがARSOAのために作曲しました。

6. マリーノのコンツェルト 第4番 I、II

Robert Di Marino(ロベルト・ディ・マリーノ)

第1楽章

音楽を現代の音楽たらしめる、その根幹をなすものはハーモニーではなくリズムである、とわたしは常に信じてきました。そのリズムはさておくとして、この第1楽章のその他全ての要素は、今から100年前、もしくは200年前に書かれたとしてもおかしくはありません。こうした側面は、ヴァイオリン・ソロのカデンツアにおいて特に明白です。

第2楽章(Mojave)

モハーヴェは砂漠地帯であり、他の砂漠と同じように、極めて荒涼とした場所になります。しかし雨が降ると、すべてが一気に花開き、景色は一変するのです。本楽章の冒頭部分は、ヴィヴァルディの協奏曲のスローテンポな楽章のひとつを思い起こさせますが、陰鬱な雰囲気から、やがて花咲き乱れる庭へと変わっていきます。

1. Symphony No 2 III, Adagio(交響曲第2番第3楽章)

Rachmaninov(ラフマニノフ)

甘美な名曲、交響曲第2番は、ラフマニノフの3つある交響曲のうち、事実上の代表作と見なされています。1907年に完成し、翌年の1月に初演を迎えました。この初演奏は世間の関心を集め、2月には再演奏がされるほどでした。特に、第3楽章は、その甘美さで有名であり、この1曲だけでもラフマニノフの名は後世に残るものになっていたでしょう。

2. Bacchanale オペラ「サムソンとデリラ」(Samson et Dalila)より

Saint-Saens(サン=サーンス)

『サムソンとデリラ』は、サン=サーンスによる1877年初演の歌劇(オペラ)。旧約聖書に登場する怪力の持ち主サムソンを題材としています。中でも、第3幕第2場のバレエ音楽「バッカナル」は有名。ローマ神話における「ワインの神」バッカス(バックス/Bacchus)を称える酒宴の踊りです。

3. Dance Macabre(交響詩「死の舞踏」作品40)

Saint-Saens(サン=サーンス)

サン=サーンスの作曲した4つの交響詩の中では最も有名な作品で、穏やかなワルツのテンポにのせて、ハロウィンのイラストで見られるような不気味な夜の墓場のワンシーンが描写されています。夜の12時を告げる時計の音を模した音が12回爪弾かれます。すると死神が現れ、ヴァイオリンの不協和音と共に、不気味な死の舞踏会が繰り広げられます。最後に、夜明けを告げる雄鶴の鳴き声が描写され、ガイコツたちが眠りにつくかのように、静かに曲は締めくくられます。

4. マリーノのコンツェルト 第2番 I、II、III

Robert Di Marino(ロベルト・ディ・マリーノ)

タンゴ音楽と出会ったことが、音楽愛好家としてのわたしの人生の転機となりました。このヴァイオリン協奏曲第2番は、古典的なソナタ形式とアルゼンチンタンゴの伝統の両方に捧げるために書いたものです。両者には、非常に劇的な、ともすれば演劇的ですらある性質、特色があります。だからこそ、両者は互いに見事に溶け合うことができですし、クラシックのソロ・コンチェルトの形式を現代的に用いることも可能になるでしょう。自分でも理由はよくわからないが、わたしは第2楽章のゆったりと瞑想的な雰囲気が気に入っています。

(第1部3、4、6 第2部4の解説は作曲者本人による)

PROFILE**古澤 巖 Iwao Furusawa**

桐朋学園、カーチス音楽院卒業。ヴェーヴ、ミルシティン、ギトリス、バーンスタイン、チェリビダッケ等に学ぶ。日本音楽コンクール第1位。ヨーヨーマ、ステファン・グラッペリ、高橋悠治等と共演。ベルリンフィルメンバーとは3枚のアルバム(HATS)を制作。毎年夏には「東儀秀樹×古澤巖×coba TFC55コンサートツアー」、2016年からは葉加瀬太郎、高嶋ちさ子との「3大ヴァイオリニストコンサート」のツアーを行っている。洗足学園音楽大学客員教授。

[《https://www.iwaofurusawa.com/》](https://www.iwaofurusawa.com/)

**ベルリン・フィルハーモニー ヴィルトゥオージ
Philharmonic Virtuosi Berlin**

1977年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1ヴァイオリン奏者であるラウレンティウ・ディンカを中心に結成。ベルリン・フィルのメンバーで構成され、完璧な演奏技巧によって困難をやすやすと克服することのできる、卓越した演奏能力の持ち主に与えられる称賛を意味する「ヴィルトゥオージ」の言葉通りの表現力はまさしくベルリン・フィルそのもの。

演奏メンバー：

Laurentiu Dinca (1st VI)
Stephan Schulze (2nd VI)
Ignacy Miecznikowski (Viola)
Christoph Igelbrink (cello)
Stanislaw Pajak (Bass)

Iwao Furusawa x
Philharmonic Virtuosi Berlin

古澤巖×ベルリン・フィルハーモニー ヴィルトゥオージのクリスマス

CHRISTMAS

数々の名曲で綴る煌きの夜。世界最高峰の音色で魅了するクリスマス。

